

大田由紀夫著 『錢躍る東シナ海

—貨幣と贅沢の一五〜一六世紀』

川戸 貴 史

名古屋大学東洋史研究報告 四十七号 二〇一三年三月発行

本書は一般向けレーベルの一冊として刊行されたものだが、前近代東アジアの貨幣流通史研究を長年牽引してきた大田由紀夫氏（以下、著者）がこれまでの研究を簡便かつ的確にまとめた一冊である。一般向けを意識して叙述は平易な筆致に務めていると拝察するが、しかしその内容は著者以外の多くの研究者による研究成果をほぼ余すところなく採り入れたものとなっており、研究史上極めて意義深い研究書と位置づける成果といえるだろう。

なお、評者は日本史の立場から一二〜一七世紀にかけての東アジア海域（「海域アジア」との呼称もある）における貨幣流通史研究を進めてきた。それゆえ本書で引用される多くの中国史料について立ち入った批評を行うのではなく、日本史からみた史料批判について言及することが多くなることを

許されたい。目次の紹介は紙幅の都合上割愛して本書の概要紹介へと移るが、本書からの引用に際しては本書で付されている振り仮名を削除している。

一

はじめには本書の目的が明快に語られる。著者によると、「一五世紀から一六世紀にいたる東アジアの貨幣と経済の歴史である。（中略）とりわけ一五世紀後半以降の「撰銭」（流通銭を選別して価値づける行為）に代表される錢貨流通の動揺や一六世紀中葉における日本銀（「倭銀」）の登場といった通貨変動がおもなトピックスとなる」（六頁）という。ここで、「撰銭」と「倭銀」が本書に通底するキーワードとなるで

あろうことが示唆される。確かに、一五〇一七世紀の東アジアにおける貨幣流通史研究において外すことのできない単語である。しかし、これらの現象あるいはモノは偶然登場した歴史上の産物と捉えるわけにはいかない。著者によるとそれは「東アジア各地で起こったさまざまな出来事が積み重なってある種の時代趨勢を形成し、そのなかから派生してきたものである」としており、さらには、「こうした歴史過程をたどることにより、一五〇一六世紀の東アジアの経済（ひいては歴史）を動かしていた力学とはいったいどんなものであったのかも明らかになってくるだろう」（六〇七頁）というのである。

本書が一国史的な叙述になるはずがないことは読者も容易に想像できるが、とはいえ国際交流が語られる際には二国間関係（たとえば日中関係など）に注目されることが多い。著者はそのような視点をも批判する。つまり、一六世紀初頭に中国で銀不足が深刻になったにもかかわらず一五二〇年代に登場した日本銀が中国ではなくはじめは朝鮮へ向かった例を挙げて、中国における銀需要の高まりや日中という単純な二国間関係の枠組みだけでは理解できないとする。そして、「本書では、日本銀の登場がより広域（少なくとも日中二国間レ

ベルではない東アジアレベル）での多様な要因・出来事の絡まりあいのなかから生じた出来事だったことを、その具体的な様相の再構成を通して明らかにしていく」（八頁）ことを本書のテーマとして著者は掲げている。以下、その視点を踏まえながら本論を紹介していきたい。

第一章では、中国・朝鮮・日本それぞれの順に、一五世紀における経済事情について詳説している。中国（本書では「大陸」と呼ぶ）では、一四七〇年代の北京で贅沢風潮が高まり、江南地方へと拡大したとする。その結果高級絹織物の消費が拡大し、主要産地であった江南の絹製品が中国全土に広く流通したという。明朝建国以来一五世紀前半までは海禁政策によって対外交易が激減し経済が沈滞していたが、一転して一五世紀後半に海禁が弛緩して国内外の交易が活性化したことが、如上のような活況をもたらす要因になったという。この時期は東南アジアとの交易が特に活発で、江南産の陶磁（特に青花）が大量生産され、輸出されていたという。

一五世紀後半の活況は中国に限ったことではない。朝鮮（本書では「半島」と呼ぶ）では、明朝の海禁によってやはり一五世紀前半までの中国との交易は急速に縮小したが、一転して一五世紀後半になると中国との交易が活発化してソウルで

は享楽的な消費が勃興し、やはり青花や華美な衣裳への需要が拡大して高級絹製品や貂皮の消費が伸びたという。日本との交易も過熱し、銅・硫黄や東南アジア産品が日本からもたらされた一方、日本へはこの頃から朝鮮で生産が拡大した大量の綿製品が輸出された。

そして日本（本書では「列島」と呼ぶ）では、やはり一五世紀中葉まで中国陶磁の流入が落ち込むなど対外交易は縮小していたが、権力者層による唐物需要は根強かった。そのため唐物は主に琉球を経由して日本へと流入した可能性が高いとする。当然密貿易による流入も想定される。琉球は日中間の中継貿易によって大いに繁栄したが、一五世紀後半から一六世紀前半に最も豊富な中国陶磁の出土量を誇ることがそれを示していると指摘する。以上の点について著者は、「明朝中国における奢侈的消費の拡大は、都城・北京が起点となり、やがて沿海部各地に伝播するという経過で進展した。さらに、同時代の朝鮮半島の贅沢風潮の盛行も考慮に入れるなら、北京を震源地とする贅沢現象は、明の版図内だけに止まらず、国境を越えて伝播していったといえる」（三九頁）とまとめており、はじめにで提示した視座がここで確認される。この現象を指して著者は「共時的現象の出現」あるいは「贅沢の連

鎖」（いずれも四〇頁）と表現している。

一五世紀後半の東アジアで経済復興の連鎖が起きた要因は何か。著者によると、北京への遷都によって進展した南北物流体制の確立、銀財政化によって北京へ流入する銀が増加したこと、土木の変以降の首都防衛強化によって物資供給体制が再編され銀の市場への投下が拡大したことを挙げている。また密貿易の取り締まりが緩んだことも影響したという。裏付けとして、一五世紀前半に東南アジア各地での中国陶磁の出土量が落ち込むいわゆる“Ming Gap”が一五世紀後半になると終息したことを示す。

朝鮮については、貢納や軍役の代納によって貨幣の布貨がソウルへ流入して市場全体の購買力が拡大して地方からの人口流入も誘引したこと、一五世紀後半に朝鮮半島の南北で対外交易が拡大したことを挙げている。それを可能としたのは生産が拡大した木綿（綿布）であり、特に需要の高い日本との間で交易が拡大していったことが大きい。

そして日本については、著者は市場法の発布件数に注目する。それによると一五世紀後半〜一六世紀前半にかけては発布事例が前代に比べて増加するという。市場法の発布は商品流通の活性化を表す指標という。ただし、データ数は少なく、

発布件数だけでそこまで言い切れるかはやや心許ない。先行研究では一五世紀全体を「生産革命」期と捉える指摘もあるが、著者は、「生産革命」との議論との関り^{マツ}でいえば、一四世紀後半以来の多分野にわたる技術革新の蓄積という列島内の動向も、因^{マツ}となり、一五世紀後半の経済成長が開花していったのである」（七三頁、傍点は著者による）と述べている。

最後に琉球についてみると、対明進貢貿易の頻度でいえば一五世紀前半が最も高いものの、それでも宋元期に比べれば頻度は落ち込んでおり、「一四世紀後半～一五世紀前半には前代まで盛んであった中国製陶磁などの流入が激減した」（七六頁）と指摘する。やはりここでも一五世紀前半の落ち込み（とその後の回復）が強調されている。

二一

第二章は、貨幣流通の実態に即して東アジアの経済動向を照射する内容となっている。著者によると、「当時の通貨変動の先駆と目される一五世紀後半の明朝（中略）で発生した銭貨流通の動揺をまず議論の俎上に載せ、ついで東アジア（おもに日本と朝鮮）の通貨変動について論じる」（八〇頁）こと

としている。

一五世紀後半の東アジアは、やはり共時的に貨幣流通秩序が動揺する。中国で銭貨流通の動揺は、一四六〇年代に発生した北京における「揀銭」によって顕在化した。この頃、洪武・永楽・宣徳のような明銭や唐の開元通宝などの銭貨は二分の一文（二二様）と評価され、粗悪私鑄銭は三分の一文の値がつけられて使用されるようになった。「揀銭」が発生したのは、粗悪な私鑄銭が市場に出回り、善悪さまざまな銭貨が混ざりあつて流通するようになったためである。これらの私鑄銭は、江南で偽造されたものが北京に流入したという。北京で銭貨流通の動揺が突如発生したのは、やはり遷都以降の南―北物流体制の形成等、前章で述べた事情が背景にあったと指摘している。市場の拡大が通貨への需要を上昇させた一方、明朝は銭貨の追加供給をせず、流通銭の不足を来したことになる。額面切り上げ退蔵するインセンティブが高まり銭貨の流動性が低下するため、銭貨の流動性を高めるには、安価（＝粗悪）な銭貨を市場に供給するしかなかったという。揀銭は徐々に南下して一五世紀末までには長江下流域の江南地方へと波及し、貿易を通じて東アジアの中国銭流通圏にも揀銭現象は伝播し、現地の銭貨流通を激しく揺さぶることに

なった。

そこで注目されるのが、日本の様相である。果たして文明一七年（一四八五）に、博多を支配する大内氏が撰銭令を發布した。内容から明銭が市場では忌避の対象となっていたことを示しており、悪銭も横行していた様子がうかがえる。一五世紀後半の博多は「個別出土銭（遺棄・廃棄銭）」の様相によると流入量のピークがあったとの指摘があり、一五世紀後半における渡来銭流入の増加、すなわち明銭と私鑄銭の流入が撰銭を惹起したことを示唆するものと指摘する。

中国銭流通圏には属さない朝鮮においてもほぼ時を同じくして朝鮮半島でも通貨変動が発生した。朝鮮では一五世紀後半に綿布が麻布にかわって布貨の主流となるが、成宗期（一四七〇〜九四）に粗悪な綿布（悪布・麤布）の流通が次第に増加したという。結局、一六世紀中葉までには一部納税手段として公認し、悪布の行使は黙認されていた。悪布流通の拡大の要因はソウルを中心とした商品流通の拡大にともなう流動性需要の高まりであると指摘する。かかる共時的現象は東アジアに留まらず、中国銭流通圏にあった北部ベトナム（大越国）においても一五世紀後半には揀銭や「偽銭」横行し、ジャワでは、当該期に標準渡来銭と粗悪銭が並存して流通し

ていることから、東南アジアにおける港市の繁栄（交易の時代）と東アジアの経済変動が連動していた可能性が指摘される。この点は著者自身が触れているが、アンソニー・リード（同著、太田淳・長田紀之監訳『世界史のなかの東南アジア―歴史を変える交差路』上、名古屋大学出版会、二〇二一年など）らによる「長い一六世紀」との密接な関連を読者に強く想起させる。

三二

第三章は、「倭銀」の登場を軸とした一六世紀前半の東アジア経済へと進む。日本では渡来銭流入が縮小したことを強く示唆する事例が確認されるという。その背景に、日本への銭貨流入ルートであった琉球からの流入が落ち込んだ影響を指摘する。同時に中国では悪銭の劣悪化がますます進行して好銭が流通界から駆逐され、好銭の海外流出自体が減少した影響もあったという。

そのような状況の中、日本銀（倭銀）が一六二〇年代に登場した。しかしこの頃の東アジア海域はむしろ交流の停滞を示す事例が目立つという。ただし京都での発掘成果によると

一五〇〇〜三〇年頃に比定される貿易陶磁は多量に出土との情報もあり、「停滞」とする評価との整合性が気になるところではある。ただし少なくとも錢貨については、日本への流入が落ち込み、列島経済も停滞局面へ転換したと推定している。

中国と南シナ海域との交流については、一六世紀初頭に広州での外国船の受け入れ規制が大幅緩和され、この前後から景德鎮製青花の東南アジア流入が盛んになった。一五一〇年代にマラッカを占領したポルトガル人が中国へ来航し一時は友好的関係にあったが、一五二〇年代前半に広州から追放すると、明朝は正徳一五年（一五二〇）に広東での抽分制を停止し、朝貢船のみを受け入れる体制へ回帰して密貿易の取締も強化した。その結果、ポルトガル人や東南アジアの海商たちは、規制が比較的緩やかな福建漳州の月港や寧波近海の双嶼へ北上して華人海商との密貿易に活路を求めようになり、月港や双嶼が密貿易の一大拠点となった。ただし著者によると、一五二〇年代は華人海商の南シナ海域での密貿易活動も一時的に鈍ったという。一五二〇年代前後の南シナ海域では沈没船の積荷から中国製青花やベトナム製陶磁器が減少する“Mac Gap”と呼ばれる現象が起きていたためである。し

かし一五二〇年代後半に浙江近海の密貿易が活発化し、一五三〇年代に入るとマラッカ―パタニー漳州を結ぶ胡椒貿易が急成長して東南アジア産の胡椒が中国へ大量に供給されるようになった。一五四〇年頃には双嶼へポルトガル人を引き込み、南シナ海域との密貿易をより活発に展開していくことになる。そして一五二七年に石見銀山発見に端を発する「倭銀」は中国大陸へ直接向かうようになった。

そして第四章で一六世紀後半へと時代は移る。倭銀による「シルバー・ラッシュ」がいかなる事態をもたらしたかが論点となる。一五四〇年代には倭銀を軸に日中ほかポルトガル人などさまざまな人々が東シナ海を頻繁に往来し密貿易が展開した。当該期日本では市場法が激増し、京都への搬入陶磁器が急増した徴候が見て取れることから、当該期の列島における商品流通の急速な拡大があったという。評者の管見の限りでは、このほか各地の城郭遺跡などからも中国福建産や東南アジア産貿易陶磁の出土事例が多く報告されており、著者の指摘は首肯しうるものである。日本経済は一六世紀中葉から未曾有の活況をみせると著者はいう。一方で日本列島では錢貨流通の「棲み分け」現象（秩序の地域差）が明瞭化した

が、著者はこれを「錢種間で貨幣機能の分業関係を形成」（一

八四頁)したとみる。この錢種間の「棲み分け」は、倭銀―唐物密貿易の交流により未曾有の商品流通が拡大して錢需要が急速に高まったものの、畿内では精錢ストックが恵まれており明錢忌避の慣行が存続した一方、条件の劣った東西の遠隔地では不足しがちな精錢にかわり明錢を流通錢の中心に据えることで錢貨流通秩序の維持をはかっていったためだという。

とはいえ日本の錢需要を満たせず、代替手段として米遣いを選好するケースが増えていった。先行研究に拠りつつ、一五四〇―一六〇年代頃の近江・摂津では、売券に記された支払手段が錢建てよりも米建ての方が優越したと指摘する。しかし米の商品化水準の高低と米建取引の多寡は、つねに強い相関性をもっていたわけではないようである。各地の通貨行使が分岐した要因を考えるには、通貨行使の在り方がどのような地域的分布を示しているのかを把握することが重要だと述べる。そこで著者は、三つ類型を提示した。それは、①畿内中央型―錢建取引が優越、②中央隣接型(近江、摂津、丹波、播磨(姫路))―錢建・米建取引が並存、③畿内周辺型―錢建取引が優越というものである。そして②で米遣いが拡大した背景は、各地域における錢貨の効用(≡利便性)に対する需

要度(錢への依存度)の相違によるものとする。そしてこのような地域分化は、①都市的消費人口の多寡(「中央型」は多く、「隣接型」は相対的に少ない)、②主穀生産・米の消費財需要の大小(「中央型」(特に都市部)は生産が少なく需要が大きい)の対して、「隣接型」は生産が多くて需要が「中央型」より小さい)、③域内における錢ストックの多寡≡渡来錢流入の多寡(京や奈良では多いが、その他の地域では相対的に少ない)、④貢納など遠隔地決済のための錢需要の大小(「隣接型」は需要が比較的低く、「周辺型」は相対的に大きい)、⑤流動性需要≡市場規模の大小(「隣接型」は大きく、対して「周辺型」は小さい)の五点がその理由として説明される。

四

第四章の後半からは、一六世紀中葉における「後期倭寇」の動向から一六世紀後半以降の東シナ海域経済の変動が読み解かれる。「後期倭寇」の活動に対し明朝が一五四〇年代から取り締まりを本格化させ、双嶼を占領して廃港に追い込んだものの、その後倭寇は暴力性を強めて略奪が激化していった

〔嘉靖大倭寇〕。一五六〇年代に漸く平定へと至って海禁を緩和すると、中国から日本への渡来銀流入が終焉した。そのため西日本で米遣いそして銀遣いに転換しており、この米遣いを前提として、日本で石高制が成立したとする。一方の中国へは倭銀とともに新大陸銀がマニラを経由して流入し、漳州一帯でも銀遣いに転換して銀貨流通が途絶したという。

当時の日本の動向について、近江国北東部における浅井氏の撰銀令に注目する。同法令は最劣悪銀以外のすべての銀を等価通用させようとしており、寛永通宝発行以前の徳川幕府の通貨政策とも通底していることを指摘し、著者は現実的な政策と評価する。近江北東部では最初に米遣いへ転換したとされるが、著者によると、当該地域は銀依存度が低いこと、商品流通が発達して流動性需要が高いこと、京都と比較して銀ストックの少なさなどの要因が重なったためという。すなわち日本の米遣いは、流動性需要の急拡大を支える渡来銀の流入が突如途絶したことがもたらした結果だという。ただし精銀に必ずしも固執しない東日本では、稀少化した精銀にかわって他の銀種（永楽銀やビタ銀）を中心に据えた銀貨流通秩序を比較的スムーズに構築し、米遣いへの劇的な転換も明瞭な形では発生しなかったと述べる。

対して中国では「銀不足」が継続して銀流入は一七世紀初頭にピークを迎えた。その結果中国では銀遣いが銀遣いを圧倒して地域内の交換媒体としても盛んに活用され、北の辺境地帯でも一種の「商業ブーム」を巻き起こした。一五七〇年代にモンゴルと和議が成立すると互市が定期的に行われ、北辺の交易規模がさらに拡大していったという。著者によると、「銀の大流動を契機に中国の南北辺境で出現した「商業ブーム」は、そこから大きな富を吸収して蓄えた経済力を背景に強大な軍事力を保有し、周辺勢力を統合して一大勢力を築き上げる商業・軍事的な新興勢力の成長を、東アジア各地で促していった」（二二二頁）。朝鮮では、豊臣秀吉の朝鮮侵攻の際に進駐した明軍が銀を大量に放出したのを契機として、銀遣いがソウルを中心とする地域で普及していった。一六一〇年代には倭銀流入が再開し、一七世紀後半に銀流通は最も盛んになった。

一七世紀前半には中国・朝鮮・日本の三地域において銀遣いが拡大し、それがさらなる動乱の火種を播くことになったという。それは、銀建物価の上昇、「価格革命」（長期のインフレーション）を引き起こしたことである。もともと、貨幣数量的な理解で「価格革命」は説明できないという。なぜか

というと、銀の価格が一国における銀の生産量や流通といった、ローカル・レベルの需要・供給関係とは無関係な次元で決定されるからだと指摘する。ここは論点となりそうだが、ひとまずは著者の指摘に従いたい。

シルバー・ラッシュが東アジアにもたらされたことで、生糸や穀物などの限られた商品が銀との相対価格を上昇させた。その結果江南地方や穀倉地帯の湖北一帯などで地域外への穀物流出を実力で阻止する行動に出たり、買い占めを行う穀物商を襲ったりするなどの食糧暴動が頻発した。こうして社会不安が一六四〇年代に頂点に達し、土地の瘦せた華北では農民たちを反乱に駆り立てる結果につながった。こうして農民反乱軍が北京を陥落し、明朝は滅亡した。満洲から南下した清朝軍が中国の派遣を握るが、満洲における深刻な食糧難が清軍南下の背景にあったという。著者はこれを中国版「一七世紀の危機」の内実と評価する。日本でも穀物や生糸の銀建価格の騰貴が発生し、江戸幕府は物価騰貴を誘発する国際市場の直接影響下からの離脱、すなわち鎖国へと向かった。こうして東アジアにおける交易活動はしばしの沈滞期に入ることになったとする。

朝鮮では一六世紀中葉以降も倭銀が一定量流入し続け、中

国への銀持込禁制も次第に有名無実化した。一六世紀後半には、布貨にかわって米穀の貨幣的使用が比重を増加させたという。一七世紀初頭に倭銀の流入が再拡大し、ソウル周辺で銀貨が優勢となった。ただし銀遣いは朝鮮全土に普及せず、「価格革命」の洗礼を受けなかったとする。朝鮮で一七世紀に大きな政治・社会変動が起こらなかった理由と著者は推定する。

以上のまとめとして著者は、「一六世紀末頃から銀を通じていったんはつながった東アジアは、一七世紀以降、各地が銀の奔流を受け止めて独自の通貨的対応をはかり、貨幣・経済秩序の一定を達成することによってふたたび分岐していったのである」(二二二頁)と締めくくっている。また、「一五世紀以後の東アジアで次々と生起した諸事象は、外に閉ざされた明朝中国に対する周辺地域の一種の「門戸開放」運動だったとみることも可能である」(二二四頁)とし、東アジア経済は、「中心―半周辺―周辺」という差別化された階層構造をもつヨーロッパの「近代世界システム」とは異なり、有機的・一体的に構造化されたものではない、ゆるやかな「共進化(共同進化)」の関係のもとで展開していったと指摘し、中国ないし東アジア中心主義的な歴史像でもなく、内在発展論的

な歴史像でもない、双方向的な東アジア史の構築を追求すべきと提言している。

五

本書は一般書として著されたものではあるが、その内容は実に深く、一五〜一七世紀東アジア海域における経済を中心とした社会動向を余すところなく描いている。そして徹底的に最新研究に目配せしているため、現時点における決定版と呼ぶにふさわしい評価が与えられるべきであろう。一般書であるため史料引用は必要最低限となっているが、専門性は極めて高く、入門書というよりも当該分野でより研究を深めたい時に参照されるべき文献となると考えられる。

本書の叙述において特筆される点を挙げると、まずは一五世紀後半における東アジア経済への見解である。著者によると、当該期の東アジアでは各地で奢侈的な消費が拡大し、そのための流動性需要が増大したが、私鑄銭を含めた追加の銭貨供給を刺激した要因と指摘する。

この視点は、少なくとも日本史においてはこれまであまり想定されてこなかったといえるだろう。一四六〇年代の寛正の

大飢饉や応仁・文明の乱に対するイメージが強烈であるからである。むしろ食糧難と戦乱による経済低迷期という印象が強い。ところが、それに疑問を投げかけるデータも登場しつつある。一つは著者が触れるように、一五世紀後半に永楽通宝が多く日本へ流入した可能性が指摘されている点である。従来は私鑄銭（悪銭）の流入に注目が集まっていたが、それと同時に明銭もまた大量に流入していた可能性があることについては、今後の議論を呼びそうである。そしてもう一つは、経済史の側から当該期に農業生産性が向上した可能性が指摘されている点である（高島正憲『経済成長の日本史―古代から近世の超長期GDP推計730-1874』名古屋大学出版会、二〇一七年、第一部第二章）。もともと当該データの評価は慎重たるべきだが、その他気候変動問題からのアプローチも踏まえると、一五世紀後半から一六世紀にかけての日本は（地域偏差はあるが）長期的な成長期にあつた徴候がいくつか示されている。当該問題については様々な分野から今後とも研究蓄積が予想されるが、本書の成果も当然ながら参照されることになるだろう。この論点はあくまで一例であり、本書ではその後の「長い一六世紀」の議論、そして「一七世紀の危機」という概念を的確に採り入れながら東アジア経済史

の枠組みで論じられている。

以下、評者の関心から以下の点について触れておきたい。一つは、上述の論点も関係するが、一六世紀前半における日中間での錢貨の移動について、中島樂章氏からかつて異論が提出されたことである。論点は琉球の位置づけであった。一五世紀後半琉球の中継貿易によって日本へ大量に錢貨が流入したとする著者の見解に対して、当時の福建と西日本における錢貨の銀建て価格は、好錢は福建の方が高く、私鑄錢はほぼ同額であることから、錢貨が中国から日本へ流出した可能性は低いと指摘する（中島「撰錢の世紀——一四六〇～一五六〇年代の東アジア錢貨流通——」、『史学研究』二七七、二〇一二年、三三三～三五頁）。これに対して著者は「無理がある」と反論している。その理由は、銀建て価格が日本より中国が高くとも、日本への輸出によって利益を得ることができうるからだという。つまり、日本からの輸入によって高利潤を生み出す商品（銅や硫黄など）が錢比価のコストを上回ればよいからであるという（大田「撰錢の世紀」をめぐる応答」、『鹿大史学』六二、二〇一五年、五頁）。一五世紀後半の東アジアにおける錢貨の移動については、今後も議論が深められていくことを期待したい。

もう一点、やや込み入った話ではあるが触れておくべき点がある。すなわち、一六世紀後半の日本で米が貨幣として使用されるようになったことについて、浦長瀬隆氏の売券分析を代表的な研究に掲げている（同『中近世日本貨幣流通史——取引手段の変化と要因——』勁草書房、二〇〇一年）点である。研究史において浦長瀬氏の研究が画期的であることは間違いないのだが、そこで指摘された具体的な点については、再検証を経る機運が高まりつつある。すでに高木久史氏が指摘するごとく、売券における価格表記と実際に支払った媒体が同一であるとは断定できない場合もあるので、それを踏まえて史料を見直す必要があると考えられる（同『日本中世貨幣史論』校倉書房、二〇一〇年）。なかでも著者は近江北部の事例として菅浦の事例に注目しているが、これも史料面から再検討が必要ではないかと評者は認識している（その取り組みはこれからではあるが）。ただし浅井氏撰錢令に対する著者の評価は評者も賛同するところである。

なお、評者の誤解でなければ、著者の見解が浦長瀬説と相違していると思われる箇所があるので、指摘しておきたい。第四章第二節で「中央隣接型」の一事例として取り上げている播磨国について、著者は一六世紀後半には一五六〇年代に

錢建てが増加しているとして、著者は分類について「再考する必要がある」と述べている（二四九頁）と述べる。しかし浦長瀬氏は播磨について、「一五七〇年代以後になるとすべて米による支払いに変化している」と述べている（同前掲著書八四頁）。同書で掲げられた表の数値もそれを示していることから、播磨では一五七〇年代に米遣いに変化したとするのが通説ではないだろうか。念のため評者もまた浦長瀬氏が拠る「正明寺文書」（『兵庫県史・史料編中世二』所収）を確認したところ、永禄二年（一五六八）までの売券はすべて銭建てで、永禄一三年（一五七〇）のものは一転してすべて米建てになっている（別表参照）。この一五六八〜七〇年の間における米遣いの普及は先行研究によって京都周辺でも確認されており、それと同様の現象であったと考えられる。よって播磨を例外とする必要はないのではないだろうか。ちなみに同じ「正明寺文書」には永禄一三年三月一二日付の黒田孝高借錢請取状があり、そこでは「買銭内式斗分不渡」との表現がある（「同」五八号、前掲書所収）。銭建てとみられる借錢について米で支払われることが期待されており、銭建てから米建てへの移行期を示す興味深い文言であろう。

既に紙幅は尽きた。多くの重要な論点についてほとんど触

れることができなかつたことは評者の能力不足であり、著者にお詫び申し上げる。本書を契機に当該研究がさらなる飛躍を遂げることを期待して擲筆する。

別表 「正明寺文書」(『兵庫県史史料編中世2』所収)の1540~60年代
の売券

	史料名	年月日	面積	価格	諸役	文書番号	備考
1	母里孫六入道ほか 連署下地売券	1547.12.17	1反	直銭600文	-	48	
2	中屋孫左衛門尉下 地売券	1547.12.25	2反	直銭1貫500文	本役称名寺9合5夕 (枳脱カ)1石宛、 其外并領免米	49	
3	藤左衛門尉下地売 券	1548.11.30	2段	直銭2貫文	本役9合枳9斗5升 代	50	
4	紺屋次郎左衛門尉 ほか連署下地売券	1552.4.11	1段	直銭1貫300文	本役称名寺エ7斗2 升	51	
5	某軒山地売券	1555.3.17	「姫路山」	直銭1貫500文	-	52	差出は「上月里軒 (村カ)」某。
6	助大夫畠地売券	1561.12.29	1段	直銭2貫700文	本役称名寺エ両季 400文	53	畠
7	黒田孝高下地売券	1567.12.23	1反	作徳1貫文	本役800文	54	「作徳」とあり米で 支払の可能性あり。
8	一房下地売券	1568.12.19	2段	直銭1貫600文	本役1貫600文	55	
9	五郎左衛門下地売 券	1570.2.5	1段	直米1石2斗4升	年貢銭800文	56	
10	弥五郎下地売券	1570.2.11	1段	直米1石2斗5升	年貢銭800文	57	
11	吉兵衛ほか連署下 地売券案	1570.5.10	1段	直米1石5斗	本役御寺江800文	59	

(註) 史料名および文書番号は『兵庫県史』によるが、史料名は一部改変した箇所がある。

講談社、二〇二二年九月、四六判、二八〇頁

(かわと たかし 名古屋市立大学大学院人間文化研究科教授)

